

青年期のイメージの言語化と自己形成 - キーツとブロンテの事例検討 -

岡田 恵里^{*1}, 松島 恭子^{*2}

^{*1} 大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程

^{*2} 大阪市立大学大学院生活科学研究科

Wording Images and Ego Building in Adolescence - Case Study of Keats and Bronte -

Eri OKADA and Kyoko MATSUSHIMA

^{*1} Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

^{*2} Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

Summary

In this essay, we aimed to consider the meanings brought to adolescent psychological development by the psychological activity of "worded expression". By studying psychological features through the poetizing of J.Keats and E.J.Bronte, we considered they had grown up with poetizing, although strongly had they felt lonely and anxious for their future, all characteristics in adolescence. We considered the function for wording images to influence ego building, through studying their history and poetry.

We surveyed and examined ego development, process of acquiring imagination world and words, and now it is evident that there is a mutual relation between words, ego and the imagination world. Moreover, it is shown that words are a help to inquire and give significance to the inner world. Thus, in adolescence, while solitude and secret are valued, psychological work groping ego and relationship to others is done, and owing to these, imagination world and wording are useful for protecting, being close with others and being inquiring themselves. Thus, psychological activity is a feature of adolescent psychological development.

Keywords : 青年期 *adolescence* , イメージの言語化 *wording images* , 孤独 *solitude* , 秘密 *secret* , 親密性 *closeness* , 自己形成 *ego building*

はじめに

『17音の青春』という本の中で、高校生の俳句を見ることができる。題名の17とは、俳句の五・七・五の文字数をあらわすものであり、17歳の高校生という作者の年齢を示すものでもある。彼らは、多少技巧を凝らしながら、俳句に等身大の姿を詠み込んでいる。彼らは、なにゆえに俳句を書こうと思ったのだろうか。溢れるほどの情報とともに暮らし、多くの言葉を知った彼らが、その数ある言葉の中から選びぬいた五・七・五の文字には、彼らの心の襞が読みとれるのである。

青年期は、自己同一性の確立という課題を背負った時期といわれる(エリクソン, E. H. 1968)。この不安定な時期に、青年はどのようにして外界との関係を処理し、自分の内界との折り合いをつけていくのだろうか。筆者らは、この点に関して、とくに彼らが示す言葉の表現に注目して考察を試みることにした。

考察するにあたり、本論文では、19世紀初期から中期を生きた二人の詩人、ジョン・キーツ(1795 - 1821)とエミリー・ジェイン・ブロンテ(1818 - 1848)の詩と詩作を分析し、彼らの詩作の背景となる時代やその生い立ち

にも光をあてながら、彼らの青年期の自己の在り様および内界と外界の折り合いのつけ方を、言語化という視点から捉えるという方法を用いたいと考えている。彼らが生きていた当時、非衛生的な環境の中で病死することは珍しくない現象であり、彼らの家族員もまた、彼らの幼少期に死に至る人物が続出した。死は、彼らにとって身近な存在だったのである。彼らは経済的に困窮しており、また、その作品は当時の文壇にあまり認められてはいなかった。こうした彼らのおかれた状況は、青年期に特徴的な状況、すなわち、孤独感と将来への不安を強く抱きながら生きることにつながっていたのではないかと推測される。しかし、そうした状況にもかかわらず、彼らは決して詩作と決別することはなかった。V.E.フランクル(1947)は、強制収容所の中にもユーモアが存在したことに触れながら、ユーモアも自己維持のための戦いにおける心の武器であり、事物を何らかの機知のある視点でみようとするのは、環境に自らをおけるように、それとの間に距離をとることを可能にするトリックであると述べている。ここにみられるとおり、外的な抑制が内的な自由を奪うとは限らない。キーツやブロンテがおかれた状況、すなわち文壇に認められない、裕福ではない等の中にありながら、詩作を続けた理由はどこにあるのか。詩人として豊かなイメージを言葉にのせて一生を過ごした彼らは、さまざまな悩みを抱えながらも、その生涯を彼ららしく生き抜いていたとも考えられるのではないだろうか。彼らの内的な自由が彼らをして詩作へと引き寄せていたといえるのではないか。以下に、二人の詩作を分析検討しながら、青年期の自己形成について論考していきたい。

・ J キーツと E J ブロンテの詩とその詩作の背景

1 . J キーツの詩と詩作の背景の提示

(以下、詩の中での / は改行を、 / / は段落を示す。)

『おお、孤独よ』²⁾

おお、孤独よ！ / もしも僕がきみとともに暮らさねばならないのなら / 乱雑に建ちならぶ暗い建物の中にいさせないでほしいのだ。僕と一緒に坂道をのぼり / - 自然の展望台まで行こう - その小さな谷間から、 / 花咲く坂道が続き、川は水晶のように輝きながらうねっている。 / 5月はずぐそのようだ。僕に五月姫の寝ずの番をさせてほしい / 大枝にまじって天幕のように覆って。そこでは鹿の素早き跳躍が / 野生の蜂を驚かせ、ジギタリスの花びらから飛び上がらせる。 / しかし僕は喜んできみとこの光景を見つけるだろう / 今なお無垢な心の甘い会話は / そのことばは思考の優雅なイメージにすぎな

いが / 僕の心を喜ばせるものだ。そして確かだと思うことは / 人類のもっとも至福の時 / きみの住処にふたつの似かよった精神が逃げる時なのだ(訳：筆者)

この詩は1815年、キーツが19歳の年に書いたものである。この年、彼は薬剤師になるために医学学校に入学した。彼は学生兼助手として働きながら勉強していた。キーツは下宿を始めたのだが、同じ下宿の友人たちは、彼が独り、窓辺で物思いに耽るのを見て、そこを「キーツの場所」と呼んだという。キーツは、薬剤師を目指しながらも、詩作における自分の才能に気づき始めており、当時有名だった詩人の中でも特にバイロンを目標とし、彼のように詩人として成功して名声も富も手に入れたと思っていた。バイロンのように詩人として生きることを願いながらも薬剤師の道を歩いていたのは、まだキーツが詩作を娯楽だと思っていた点や次ぐ肉親の死、お金にうるさい後見人の勧めなどによるものだった。キーツの下宿先あたりはごみごみとした陰気な場所だった。そして学生兼助手のキーツは毎日が忙しく、心休まる時は少なかった。そんな彼の楽しみは、「キーツの場所」で物思いに耽ることと、休日にグリニッチの丘に登ることであった。

こうして薬剤師を目指しながらも詩作から離れられずにいたキーツは、バイロンにあこがれ、詩人であり雑誌編集者でもあるリー・ハント、詩人のワーズワースやコールリッジなどを尊敬し、チャールズ・クラークという芸術や詩などの分野に精通している人と、文学や詩について話し合っていた。キーツはチャールズ・クラークに詩を見せたり、二人で即興の詩を作ったりしていた。詩を書き続けながら、1816年2月、彼の医学研修が終了する。それから3ヵ月後、彼の将来を詩人の方へ近づける1つの出来事があった。彼の詩『おお、孤独よ！』がリー・ハントの雑誌に掲載されたのである。翌月には彼は幼いころに過ごした土地を訪れてその自然美に触れていくつかの詩をつくった。薬剤師になるべきか悩みながらも、その翌月には薬剤師試験を受け、合格した。合格後も彼は詩を書き、弟やチャールズ・クラークに手紙とともに書き送っていた。弟へは自分には詩作の才能があり、それが自分の進むべき道であるという内容の書簡詩を送っている。しかし、チャールズ・クラークには詩作とは人生の道楽だという内容の書簡詩を送っており、彼の中で詩人になるか薬剤師になるかという問題が大きく揺れていたことがわかる。

その彼が詩人として生きる決意をしたのはこの年10月のことである。チャールズ・クラークを訪れた彼はそこ

でホーマーの訳詩を読み、その詩の素晴らしさに感動した彼は、詩作はただの道楽ではないと感じ、詩人として生きることを決意した。彼は1817年には初の詩集を出版した。名前も知られていない彼の詩集はほとんど売れず、いくつかの雑誌に彼の詩を認める詩評、認めない詩評が掲載された。彼は批判的な詩評を気にかけることなく次の詩に取りかかっていた。

さて、彼の初期の詩作は、自分の思いや考えを詩という形で他者に伝えることが詩作の動機の中心であった。神話を題材にした芸術的な詩が増える中期の詩作では他者に伝えることは動機のひとつであっても中心ではなく、彼は詩人が他の職業をもつことを批難し、ただ思うままに詠むことが彼の詩作の目的になっていた。それが弟の死後、彼の詩作に絶頂期が訪れてからは、彼は美しいものや神話、芸術だけに埋もれるのではなく、現実の人生を生きることに焦点をあてられるようになっていった。その頃の詩に次の『サイキに寄せるオード』がある。

『サイキに寄せるオード』²⁾

ああ！女神よ！お聞きください 僕の美しくもないこの詩を / 芳しい薫りで僕を動かす力 忘れることのできない愛しさに / 悩まされた この僕の詩を / そして許してください きみの秘密を詠ってしまうことを / ...省略... / 確かに僕は今日夢を見た あるいは覚めた目で 見たのだろうか / 翼をもったサイキを / 僕は森の中をぼんやりと彷徨っていた / すると突然に それはもう驚きで気が遠くなるほど突然に / 見たのだ 2人の美しい人たちを 寄り添って眠っている姿を / ...省略... / 彼らは穏やかに息をしながら 草のベッドで眠っていたのだ / ...省略... / その翼を持った少年は誰であるか 僕にはわかった / しかしきみは一体誰だったのか ああ 幸せな幸せな鳩よ / 少年の恋人 サイキ その人であったとは！ / / ああ オリンパスの 色あせた神々の層の中で / 最も遅く生まれ 最も愛くるしい幻影！ / ...省略... / 彼女たちよりも美しいのに 神殿を持たないきみ / 花に埋もれた祭壇もなく / 深夜に 芳しい嘆きの歌を歌う けがれなき聖歌隊もない / 声もリュートの音も 笛の音も聞こえず / 鎖でつるされた香炉から溢れ出る甘い香りもない / 神殿も 森も 神託の場もなく / 青白い唇の 夢みる預言者の熱意もない / ...省略... / 幸せな敬虔なる心から遙かに遠ざかった今の世でさえ / きみの光り輝く透明な翼は / 色褪せたオリンパスの神々の中にあって羽ばたいている / そして僕はそれを見て / 僕の瞳は 靈感を与えられるから / 僕は詠うのだ / / さあ 僕をきみの聖歌隊にして下さい そして嘆きの歌を / 深夜に歌

わせて下さい / 君の声 きみのリュート きみの笛 / 鎖につるされた香炉から溢れるきみの甘い香りとなって / きみの神殿 きみの森 きみの神託の場 / 青白い唇の 夢みる預言者の きみへの熱意となって。 / / そうだ僕はきみの司祭となろう そして神殿を建てよう / 僕の心のどこか 誰も足を踏み入れたことのないところに / そこでは 快い痛みを伴って新たに育った 思考が枝をのばして / それは 松の代わりに 風の中で囁くだろう / 遙か遙か遠くで 黒々とした集団をなしているその木々に / 方々切りたつた険しい尾根をもつ山々を 羽毛のように柔らかに蔽わせよう / ...省略... / そして この静けさ広がるただなかに / 薔薇色の聖域を創り 飾り立てよう / 頭脳の働きが生み出す花のリースのからむ格子垣で / 薔や鐘状の花や名もなき星型の花で / 「想像力」という名の庭師が創り得た全てのもので / その庭師は花を育てるが 決して同じものは創らない / そして 影をなす思考が得ることのできる / やわらかい歓びのすべてを / きみのために用意しよう / 光り輝く松明 夜に開く窓を / 心あたりの恋人を迎え入れるために！ (訳：筆者)

この詩はサイキという女神に対して詠われたものである。サイキとはギリシア語で魂という意味であり、ギリシア神話では苦悩を体験した魂を象徴する女神である。出口(1997)³⁾は、この詩は失われた世界の回復を表現しており、個人の内なる生の発見としての宣言のポエムであると述べている。このことを推測させる文章が、1819年4月30日、『サイキに寄せるオード』の初稿とともに弟へ宛てた手紙に見られる。J. キーツは、手紙に「これはこれまでのものより豊かに読めるだろうし、これがきっかけになって他のものも一層穏やかで健康な気持ちで書ければよいと思う」⁴⁾と書いていた。この穏やかな状態に至るまでにはさまざまな苦しみがあったことだろう。

2. E J ブロンテの詩と詩作の背景の提示

E J ブロンテ(以下：エミリ)の場合、8歳頃にはお話作りを始めていた。エミリ・ブロンテが創作を始めたのは、1826年に姉と兄、エミリそして妹の4人で作った『若者たち』というお話である。これは父が兄にお土産の兵隊人形を買ってきたことがきっかけになっている。4つの兵隊人形を主人公にしてお話を作ることから始まった。これに対するエミリの関与は少なく、エミリがより多く関わったお話作りは、同じ頃姉と作っていた、2人だけの秘密の「ベッド劇」と呼ばれるものである。4人で始めた『若者たち』は、姉の入学前には『アングリア

物語』に変わり、姉と兄が中心になっていた。姉の口ウ・ヘッド入学を境に状況が変わり、エミリは12歳ごろから妹と2人で『ゴンドル物語』を作ることにした。これは妹とエミリだけの物語で、残りの2人の介入は行われなかった。『ゴンドル物語』はほとんどがエミリの創作で、エミリも寄宿学校へ行くようになると『ゴンドル物語』は中断した。しかし寄宿学校の生活に慣れないエミリは体調を崩して帰宅する。この、人と関わらず、食事を取らずに体調を崩して帰宅する方式は、彼女の人生で3回繰り返されている。入れ替わりで妹が寄宿学校へ行ったため、エミリは独りで『ゴンドル物語』を創作することになった。父や叔母等がいたが、彼らがエミリに干渉することはなく、彼女はそこでマイペースに過ごしていた。その頃に、『私は孤独な人間』が作られた。

『私は孤独な人間』⁵⁾

私は孤独な人間 / 私の運命を誰もたずねてはくれない / 誰の目も悲しんではくれない / 私は生まれてから / 憂いの思いも歓びの笑みも惹き起こしたことがない / ひそかな歓びとひそかな涙のうちに / この移ろい易い人生は過ぎ去った / 18年たっても友はなく、生まれた日と同じようにひとりぼっち / 私にも包み隠しておくことのできない時があった / この世がわびしく思える時があった / 私の悲しい魂がその誇りを忘れ / この世で私を愛してくれる者を求める時があった / しかしあの頃は若い日の感情の昂ぶりにほてっていたけれど / それもそれ以後は心労に抑えられてしまった / そしてずっと昔に消えてしまって / そんな時があったとは今はとても信じられない / まず青春の希望が潰えさり / ついで空想の虹がまたたく間に消えて / それから経験が私に教えてくれた / 真実は人間の胸のなかには決して育ちはしないと / 人はみなうつろで卑屈で不誠実だと考えるのはまったく悲しいことだった / しかし私自身のところを信じながら / そこに同じ墮落を見出すのは なおさらに悲しかった(訳: 中岡洋)

この『私は孤独な人間』という詩は、寄宿学校から帰って、心身ともに回復し、独りで考える時間の余裕もあったエミリが自分に目をむけて詠んだ詩のひとつである。この頃以降、エミリは独りで詩や物語創作を進めていく。「ゴンドル物語」も妹が働きに出ることで他者の目に触れることもなくなった。エミリは、日中、台所仕事の合間に小さなノートに書き物をしたりお気に入りのヒースの咲く丘を歩き廻ったりし、夜は暗く静かな彼女の部屋で想像力を働かせていた。その小さなノートは彼女の詩でいっぱいになっていった。彼女はそれを誰にも見られないように箱の中に入れていたという。そしてエ

ミリの創作物が誰にも見られない状態が続いていた中で、1845年、初めてそのノートが他者の目に触れてしまった。偶然、台所のテーブルに置かれたままになっていたノートを姉が読んでしまったのである。姉はその詩の完成度の高さに驚き、これを世に出さないではいけないと思い、エミリに詩を見てしまったこと、そして出版すべきだということ伝えた。

姉の告白と出版の勧めに対し、エミリは激怒した。姉がノートの中を見てしまったことも出版のような愚かな行為を勧めることもエミリには許しがたいことに思えた。そのエミリも姉と妹の2人による説得に折れて出版に同意した。ただし掲載する詩はエミリ自身が選ぶこと、そしてエミリの名前は決して出さないことが条件だった。そして1846年『カラ、エリス、アクトン・ベル詩集』が出版された。それぞれが小説を出すとともに作者に注目が集まった。その後、姉は出版社に、エミリとの約束を忘れて、三姉妹の本名を言ってしまい、それを知ったエミリはたいへん怒った。エミリの小説『嵐が丘』に対する厳しい書評が彼女のもとに届けられたが、彼女はそれらを読んでも動じることはなかった。20歳を過ぎてからは、次のような詩も作っている。

『わたしの魂は憶病ではない』⁵⁾

わたしの魂は 憶病ではない / 世の嵐に悩む領域で ふるえおののく者でもない / わたしには 天の栄光の輝くのが 見える / 信仰も 同じく恐怖から わたしを護って輝く / / おお わが胸のうちの神 / 全能にして とこしえにいます神 / 不死のいのちであるこのわたしが あなたのうちに力を得るとき / わたしのうちに やすらいたまういのちの神 / / 空しいのは 人々のこころを動かす / 数知れぬ信条 口にはいい難いほどに空しい / 枯れ草のように また果てしない大海原の / はかない泡沫のように 無価値なのは / / あなたの無限性に しっかり取りすがり / 不滅性の 不動の岩へ / このように確実に 錨をおろした者の / こころのうちに 疑いを目覚めさせることだ / / 広く抱擁する愛をもって / あなたの靈魂は 永遠の年月に生命を与え / 天上に遍在し 立ちこめ / 変化し 支え 溶け 創造し 養うのだ / / 大地と月が消えはて / 太陽と宇宙が 存在しなくなっても / あなただけが ひとり残っていれば / あらゆる存在は あなたのなかに存在するだろう / / そこには 死の入る余地はなく / その力が無となし得る 原子もない / あなたは実在 息吹であり / あなたの實質は 決して破壊されはしないのだから(訳: 中岡洋)

・ J キーツと E J ブロンテの詩作にみる青年期

の自己 孤独感と秘密の観点から

1. キーツの孤独と秘密と自己

下宿時代のキーツにとって楽しいことは、「キーツの場所」で物思いに耽ることと、休日にグリニッチの丘に登ることであった。グリニッチの丘の自然は、幼いころ過ごした田園風景を思い起こさせたことだろうし、美しいものに触れることができた。上記した『おお、孤独よ!』の中では下宿先周辺とグリニッチが、「乱雑に建ちならぶ建物」「自然の展望台」ということばで登場している。また、キーツは後に『5月に寄せるオード』という詩を書くのであるが、それが女神Maia(Hermesの母。美の女神。春の女神。)を讃えたものであるように、『おお孤独よ』の5月つまりMayは5月であり、5月祭りで讃える女神つまりMaiaでもあるのだろう。Maiaが美の女神でもあるところにも意味があると考ええる。なぜなら彼の心は、美しいものを強く求めてやまなかつたからだ。そして美しいものの世界に惹かれる彼の心は「無垢」で、そこで交わされることばは「思考の優雅なイメージ」にすぎない非現実的なものであるが、そういったものこそ彼を喜ばせるものであり、彼の心は暗い日常から解き放たれ、美しい光の中に開放されたことだろう。彼にとって、恣意的に孤立する空間は大切なものであった。ひとりになっていたのは「キーツの場所」やグリニッチの丘であり、どちらも彼の心が、天を駆け巡るように自由となる場所だった。心に浮かぶイメージに自由を与えるために彼はひとりである必要があった。

自ら孤独を求め、非現実のイメージ世界に旅立って至福の時に浸る。しかし『おお孤独よ』の最終行にあるように、キーツは当時、それを逃避であると思っていた。19歳のキーツにとって孤独は、楽しみの世界に旅立つ入り口であり、現実から逃げる手段でもあり、限られた時間で終わるものなのであるように、彼の孤独は人から離れるものであり、かつ、他者との関係性を無視できないものである。孤独を入りにしたキーツのイメージ世界への旅は、旅から帰ることを伴っている。

このようにキーツが詩を作っていた場所は、「キーツの場所」やグリニッチの丘など秘密の空間だった。そして、彼はその秘密である詩を、弟やチャールズ・クラークなどに見せている。彼を詩作に駆り立てた感情は誰かに伝えられることを欲し、彼をして語らしめる。語られる相手は彼が心を許している相手や尊敬している相手である。詩の受容によって、キーツと彼らとの間に親密さが生じただろう。青年キーツにとって彼の詩が受容されることは詩に託した想いが認められ、その想いを抱く彼自身の存在が認められることだった。

彼は心の内の秘密を詩に表し、その秘密の共有を求め、心にその秘密をもつ自分を確立していったと思われる。秘密をもつ自分が彼の中で肯定され、秘密の内界に自信をもった彼は、その秘密のみに重きを置いた詩をつくるようになり、内界にばかり目を向けるようになった。そして内界に従った詩以外のものを書く詩人を否定するようになる。彼は他者との交流をあまり持たなくなった。しかしキーツは弟の死後、実際に彼が生きているのは外界であり、そこで生きていく方法を考えねばならなくなった。これによって内界だけに向いていた目が外界に向けられるようになる。ここで彼の詩に対する考えが変わっていく。彼はどのような知識も詩作の役に立つと考えようになり、詩人が詩作以外の仕事をして認められるようになるようになった。キーツは秘密の世界から再び他者のいる世界に戻っていった。秘密を持つことによって自己が確認され、秘密を共有したい欲求によって告白して他者と親密さを得るという(小此木1980)⁹⁾。その一方で、秘密の共有の失敗を乗り越え、共有できるものもできないものもあるとわかった上で再び他者と関わるようになる。キーツは再び他者と関わるようになった時、自分自身を客体視できるようになったのではないだろうか。自らの客体化を促し再形成された自己を支えていたものもまた、彼の秘密であったのだろう。

2. E. J. ブロンテの孤独と秘密と自己

『私は孤独な人間』によると、寄宿学校から帰宅したエミリは、孤独を感じ、「生まれた時から孤独でひとりぼっちであり18年間友がいない」と綴っている。そんな彼女の住むこの世は「わびしい」と言う。エミリは「若い日の感情の昂ぶり」は包み隠せないほど激しいものであり、その若い日々がもたらした心労は、その想いも「青春の希望」も「空想の虹」も消してしまったとエミリは感じた。心労をもたらした経験からエミリが得たものは、ひとが「うつろで卑屈で不誠実」な墮落したものであることだった。「愛してくれる者を求める」感情の昂ぶりが、ひとはうつろで卑屈なものだということを感じさせたために、エミリにとってその想いは「魂の誇り」と対極に位置するものとなってしまったのだろう。

ひとが墮落したものであるというように、ひとの、広くは世の内奥にある否定的な側面に気がついたのがこの詩を書いた時ではなく、この詩を書いた頃に確信的に気がついたのは、それが自分の中にもあるということだろう。独りでいるときにエミリは過去をふり返り、自分の中にもその墮落を見出した。それはエミリにとって悲しいことだっただろう。これは青春時代の一種の潔癖感(河合1987)によって毛嫌いしていた暗い側面を、自

分の中に位置づけて新たな自分を獲得する作業だと考えられる。完璧で潔癖な自分が崩れ去る時の幻滅感が再び自分を発見する契機となった。それが悲しくも恐ろしいことであつたらうことは想像に難くないと思われる。

エミリにとっての孤独は、他者を意識したものである。家族と一緒に住みながらも、自分が独りであることが強く意識されている。魂の誇りを忘れて愛してくれる他者を求めていた過去の自分に幻滅を感じながら、それを含めた独りの自分を発見したとき、幻滅し、自分が孤独であることを知った。つまり、西平(1973)⁷⁾の「孤独からの逃走」という言葉を借りるならば、エミリは「孤独から逃走」していた自分に幻滅して、それを含めた独りの人間として孤独を知ったということになるだろう。そして孤独でいられるのは魂の誇りを持っているからだと考えている。

こうした形で孤独に気づいたエミリだが、小さい頃は、秘密の共有による他者との融合状態を形成していたことが上述したエミリのお話作りのエピソードに現れている。はじめは秘密の共有による融合状態を姉と形成していたが、姉が家を出たことで融合相手を新たにしないでなくなったエミリは妹を選んだ。このように、彼女にとって秘密は、他者との間の親密さが重点であったようだが、寄宿学校から帰宅して以降、秘密を自分だけでもつことに重点を置くようになっていった。寄宿学校での周囲の好奇の視線も理由の一つだっただろう。彼らの目がエミリを他者とは違う自分に出会わせたであろうし、その自分の内界は他者から守られるべき秘密となったことだろう。別の理由には育ててくれた伯母が非常にプライバシーを重んじていたことも挙げられる。こうして自分だけの秘密を持つことによって自分を再形成していったのだろう。彼女は以後、秘密を他者と共有することを求めることは無かった。しかし、このことが彼女に他者という存在を破棄させたことにはならない。秘密への他者の侵入を嫌うことは他者存在を感じていることにほかならない。そして出版への同意ができたことは、おそらく彼女の内側にある秘密の世界が彼女をしっかりと支えていたことによるのだろう。出版の反響は、出版物がどのように解釈されようと他者の目は彼女の内側に侵入できないことを彼女に示したかもしれない。さらにエミリの自己が確実なものになったと思われる。

3. 青年期の孤独感と秘密と自己

このように、青年期の孤独感のもつ意味として、自他間に距離をとらせ、自分の内面に目を向けさせ、イメージ世界と現実を行き来することで新たな自分を再形成す

ることを手助けすることが考えられる。

また、秘密に関して、キーツとエミリに共通していることは、秘密をもった彼らはまず他者との秘密の共有から始めたことである。そして共有の失敗により、他者存在を認識し、秘密の領域をもつ内界に生きることを中心とする。このような時期をぬけて、再び他者の目に対する耐性ができると、自分を客体的にみる視点も獲得していった。こうして、外からの視点でも内からの視点でも確かな自分を得ることによって、再形成された自己という秘密の内界に支えられ、外界を生きていくようになる。

秘密は語られることで他者との融合・親密状態を生み、またその人物を孤立させもする。そして青年期にはその作用によって、そして秘密をもっていることによって、我々は他者と異なるひとりの存在としての自分を見直し、再形成することができるのだろう。

・ J.キーツとE.J.ブロンテにみるイメージ世界

キーツの『サイキに寄せるオード』とは、サイキという女神に対して詠われたものである。サイキとはギリシア語で魂という意味であり、ギリシア神話では苦悩を体験した魂を象徴する女神である。出口が言うように、失われた世界が回復していく様子は、サイキには何もなかったことを「～もない」の繰り返しで強調した後に「きみの～」を繰り返してサイキのためにそのひとつひとつが回復されていくところに描かれている³⁾。サイキのための回復とは、女神の神殿・世界の回復であり、魂の世界の回復でもある。この「ないもの」と「あるもの」とを並び立てるところに、無を描いて有を浮かび上がらせるという構図が見える。そしてこれは現実の世界への関心がキーツの内界を浮き彫りにし、外との関係において内界を生きる力を回復していく様子でもあると思われる。

この詩のはじめあたりで、詩人の視界はぼんやりとした状態から急激にサイキの姿の発見をするという形をとっており、これを出口は「楽園はどこにもない」と知ったことを表すと述べている³⁾。ぼんやりした状態の目がとらえている風景は「楽園」であり、これまでの彼の詩によくみられた風景、美しい森の中の風景である。彼はそこから脱したのである。また終わりあたりには「思考」が出てくるのに対して、はじめは「ぼんやり」であり思考が介在していない。はじめの思考が介在しない状態では、ただ目に入る風景をリアルだとしており、終わりの「思考」は「思想の奥に創られたリアル」⁴⁾を見ている。思考は「快い痛みを伴って新たに枝をのばす樹木」であり「影なす思考」として「光り輝く松明」を浮き彫りにする。思考には肯定的な面と否定的な面があり、表裏一体

に存在し、彼のリアルを生み出しているようである。思考をはたらかせる「頭脳」は「想像力という庭師」とともに「聖域」を飾り立てる。この聖域はサイキの神殿が建つところであり、キーツの「心のどこか、誰も足の踏み入れたことのない所」、他者が入り込まない孤独な個人的空間である。その空間は「庭師」や想像力が生み出した「名もなき花」「ひとつとして同じものではない花」で飾られるのであるが、これはこのイメージ世界が固定的でないということだろう。花は名前に縛られることなく、そこでは次々と新たな花が誕生する。

同じように魂を詠んだものとして、エミリの『私の魂は臆病ではない』を見てみると、この詩では、彼女の魂は臆病でも世の嵐に「震えおののくもの」でもなく、天の栄光も彼女の信仰も、神も、彼女の胸の内において全能だと詠われている。エミリの魂は神の内にて力を得るのである。その神はエミリの中において彼女に力を与える命の神である。エミリの描いている神は、その靈魂は永遠の年月に生命を与えて、天上に遍在しあらゆるものを養い、あらゆる存在をその中に存在させる。そして、エミリにとって空しいものとは、人の心を揺り動かす信条であり、無価値なものとは、神の無限性と不滅の自然をかたく信じている者の心に疑いを目覚めさせることだと言う。

エミリは外界を越えた全く別の場所にある世界(内界、天上)を講ると同時に、それを信じている自分自身の強さや外界に流されることのない強さをも詠んでいる。それは内なる世界にいる神に護られているからであり、神に守られているとき彼女は力を得たと感じるのである。エミリにとって、神さえ存在すれば、現実の死は魂の死ではない。また彼女は神によって創造され養われて、神の中に存在し続けるのだろう。そしてその神はエミリの内にいる。あまりに強すぎる万能感のようにも思われるが、つまりは、このことは、彼女の内界には神の住む領域があるといことだと捉えられるだろう。

エミリはその神の住まう空間である魂の領域をもつことで外界に圧倒されたり怯えたりせずに生きられると言う。そこではあらゆるものが存在し、変容し、創造される。そこはエミリの想像力の源なのだろう。この世界はエミリの信仰に基づく、エミリのイメージ世界と考えられる。

このように、イメージ世界とは、キーツのそれは、サイキの神殿が建つ聖域であり、エミリのそれは神の住まう領域であり、どちらも外的現実とは隔たっており、自分そのものとも異なっている。

・自己の誕生と言葉の獲得の流れにみる言語化

の作用

ここで一度、生まれてからどのように自己が誕生し、言葉が獲得されていくかという、青年期にいたる前の様子を通して、自己形成過程の中で言語化がどのような機能を果たすのかを概観してみたいと思う。それを踏まえて、次項で青年期におけるイメージの言語化の機能について検討していきたい。

まずは、誕生してからの自己の発達の流れを、他者との関わりという視点から概観する。乳児が満ち足りた眠りのときと、外部からの刺激に何らかの反応をしめしているときとを想像してみると、満ち足りた眠りのときは外界と溶け込むように一体化し、例えば自分の呼吸のリズムがすべてかもしれないのに対し、刺激に反応をしているときは、外界との融合から一瞬の分化をしているように思われる。こういった分化と融合を繰り返しながら、起きる時間がのび、体も成長し、手で周囲のものを探索したり、ひとに笑いかけたりしながら発達していく。

8ヶ月頃には人見知りが見られる。小此木⁶⁾は、人見知りとは見知る不安と見知られる不安によるものだとして述べている。8ヶ月児のそれも、見知る・見知られる不安だろうか。そうだとすれば、8ヶ月児も、対象を自分とは異なる人間と捉えているだけでなく、相手に見られる自分を感じていることにもなる。8ヶ月頃には、ものの永続性を獲得するといわれており、彼らが対象を常に外在する人として捉えることができると思われる。また、バイバイを正しく行っているならば、それは自分を相手側においた場合に見える手のむきが分かっているからであり、さらに再び自分側に視点を戻すことができているからである(浜田1995)。これらのことから、8ヶ月不安の人見知りも、見る・見られる関係による不安だろうと思われる。この頃には、バイバイの行為に見られるメカニズムのように、視点を戻す拠点として、自分側の視点があり、相手の位置にも自分の視点を置いて、それにより、見られる自分を感じていると考えられる。

10ヶ月頃には、意図性をもった物の扱いが見られ始め、これ以降、対象と自分だけでなく、対象同士の関係も見るようになる。対象への多角的な視点の芽生えである(須田1998、中島1999)。1歳以降は、象徴世界が育ち、身体の運動機能の高まりも加わり、未知の外の世界に飛び出していく。未知の世界で不安になるとエネルギーを補給すべく、現実のあるいは象徴の重要な対象の元へ一度戻り、また外へ出て行く。幼稚園に入ると、家族以外の他者と出会う。この同年齢他者との関係は、彼らに他者存在を強くアピールするだろう。なぜなら、はじめは、相手は異なった基盤をもち、共通の象徴世界をもたない

者であり、そういった相手との間では、世界を共有すべく、それぞれの象徴世界のすり合わせを行う必要が生じるからである。中島(1999)⁸⁾は、グループで遊ぶようになる、個々の象徴世界は調整されて共通部分を持つようになる」と述べている。共通部分を持つようになった子どもたちは、共通部分という相互に近い所をもちながら、異なる所を持つものとして遠い存在でもあるのだろう。ひとは、お互いに近づきつつ、離れつつ、相手との距離を模索しながら、相手や集団の中での自分を作り上げるといふ骨の折れるような作業をしていくのだろう。

ところで、このように他者と近づいたり離れたりしながら生きることは、自分の中心に核となる自分があるから可能なことなのではないだろうか。核がなければ、自分を見失い、他者の目にうつる自分だけという、ひどく不安定な状態になってしまうのではないだろうか。しかし、核となる自分があるということは、他者と異なる自分が浮かび上がることであり、そういった他者との間で浮き彫りになる自分、他者から返る反応の中に見る自分も同時に在るのだろう。

青年期に入ると、他者との差異がよりはっきりと感じられるようになり、自分とは何かという問いを持つようになる。光が強いほど、闇が濃くなるように、他者存在がはっきりするほど、孤独が目立つ。青年期の特徴にこの孤独感が挙げられる。孤独を怖れることは他者のまなざしへの配慮から引き起こされる⁷⁾。そこで、他者のまなざしに耐えうる、他者との関係に見る自分を築き上げるために、たとえば日記などによって試行錯誤してみたりする。そして、他者との間隙を認識した上で、自分本位に生きるのみでも、他者とただ同調して生きるのみでもなく生きていくために、青年期には、核となる自己をもちつつ、自分や自分の考え等についてさまざまにイメージをめぐらしながら、他者とともに生きていくために外界に定位する、他者との関わりに見る自己を再び形成していく作業をするのだろう。

このように、自己は核となる部分と他者との関わりから見る部分とが発達して、どちらも含めてひとつの自己が発達していくのだろう。

次に、言葉の獲得過程を概観してみる。0歳児は、言葉を獲得する前の段階である。言葉は持っていないが、2ヶ月ごろには調音機能が整い始め、調音を出すようになる。10ヶ月ごろには、発生模倣が見られ、ギフティングという行為が見られるようになって、乳児の行為に意図性が見えはじめる。それ以降には、指差しが始まり、これは、「指をさすしぐさ」と「指差したもののや方向」に

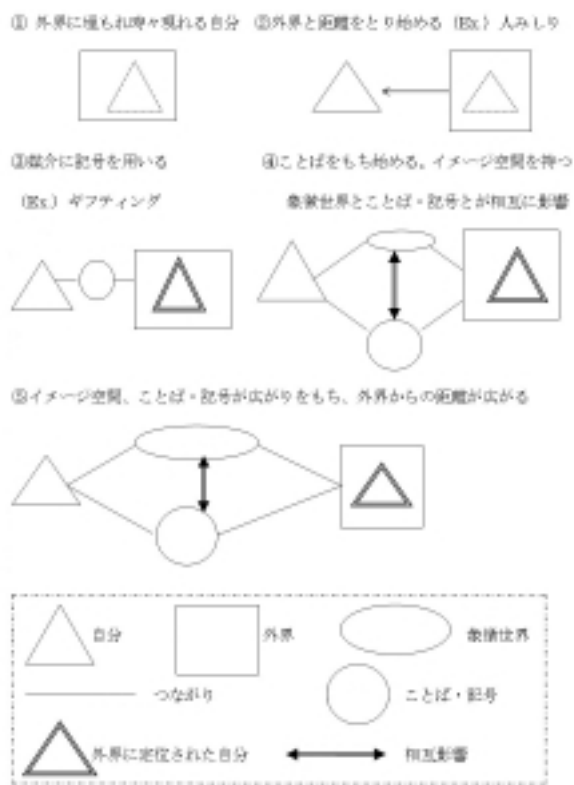
よって何かを表現しようという行為である。記号(しぐさ)を媒介とした表現の始まりである。1歳頃になると言葉を使い始める。そして象徴遊びや延滞模倣をするようになる。こうした象徴世界を持ち始めると、一つの状況を別の言葉で表したり、違う状況の中に共通点を見つけて同じ言葉で表現したりできるようになる(中島、岡本、村井1999)。2歳で文章となり、自分のことを自分の名前と呼んだりする。3歳になると作話したり、友達と会話したりし始めるが、それは依然として自己中心的な発話が多いという特徴を有する。4歳ごろになると、より物語的な作話が可能になり、他者と共有すべく言葉を調整するようになる(高橋1993)。

この言葉を獲得する様子を眺めると、言葉の獲得は、象徴世界の獲得と関係があることがわかる。ここで、言葉自体の特徴を考えてみる。言葉は記号である。どのようなことを言葉にするにしても、その託された内容が、話し手・聞き手に想起される必要がある。パフチン(1929)⁹⁾は、記号は外的なものであり、その外的な記号に内面化された記号が対応しており、解読とは未知の記号に既知の記号で答えることだと述べている。了解しあうには、言葉の選択の際、両者に既知の記号を選ぶ必要があるという制限を受ける。しかし、一方で言葉は広がりも持つことができる。

乳児は言葉を用いなくても、身体感覚でもって、世界が分かれば目の無いものではないことを知っているが、言葉の世界の獲得によって、新しい世界の分節化を手に入れる(浜田1995)。この分節化は、ただ細かく切り分けるという意味ではなく、のちに言葉のもつ意味が、言葉の連環によって広がりを見せる前の段階として、あるものとあるものは大きく分けて別のものであるといった分類を行うことだと思われる。ここで、言葉がそれ自体主体的なものではなく、意味が付与されねばならない記号として客体的なものであることが有効性をもつ。言葉は、表す記号と意味される客体と意味する内容という3要素のつながりで構成されている。意味する内容と意味される客体との強い結びつきが、表す記号としての言葉が間に入ることで和らぎ、言葉のもつ意味が深みと広がりを増していくと考えられる。

このように、言葉の獲得は象徴世界の獲得と関係し、言葉が記号であるがゆえの制限はあるものの、言語化は、対象に多様なイメージを付与する機会や、現実とは少し距離をおいて関わる機会を与えてくれるだろう。これが、さらに、象徴世界の複雑化も促し、それを持つ人自身に、そして現実世界に、さらなる深みと広がりをもたらしてくれると思われる。

自己も世界とは分かれたものであり、言葉は世界と人や事物を分かちつものである。そして、自己の発達も言葉の獲得も、象徴機能の発達とともに進んでいるように見える。このことを図示してみると下図のようになるだろう。



(Fig:外界からの分化とイメージ空間やことば・記号の獲得)

・青年期におけるイメージの言語化の機能

で、言葉を獲得し、象徴世界を手に入れることは、現実を、自己と隔たりを置いて見つめることを可能にすると考えた。ここでは言葉を獲得した青年が象徴世界を言葉にすることは、どのような機能を持つのかについて考察したい。

ひとつには、¹⁾にあるように、現実と距離を置いて関わることを可能にするということだろう。それにより、現実、に、所有している言葉のうちのいずれかを当てはめて、それを把握し、意味をさまざまに付与できる。

フランク・カーモード(1967)²⁾によると、私たちは「ことの最中」に生まれ、「ことの半ば」に死ぬので、「終わり」を作らねばならない。私たちが現実の世界で体験したことを一つのまとまりある経験として所有するためには、その出来事に始まりと終わりを作らねばならない。

作られたひとつの物語は外的現実から恣意的に切り取られた独自の物語であり虚構である。経験が所有されるとき虚構の物語作りが行われる。上述のようにここで言語化が役立つ。言語化ということは、そこには象徴機能が関係しており、つまり、この虚構の物語作りには、想像力が一役を担う。そして想像力が働くところであるイメージ世界が、現実の意味づけに役立つということになる。

イメージ世界は、J.キーツとE.J.ブロンテの場合の「独りである窓辺」やグリニッチ、「ヒースの花の咲く丘」のように、個人にとって特別な場所にいる時などを入り口とした、内界と外界の間のものだと想定する。イメージ世界への入り口が開き、ひとはその世界へ旅立つが、その中では想像力が自由に様々なイメージを創っているので、それらの中から相応しいものを選び出さなくてはならない。このように、イメージの選択は、内界との照らし合わせによって篩いかけられる。さらに表現するために、外界の基準によって、選択肢が制限される。この制限の中、折り合いをつけて言語化することに難しさが伴うことは十分に推測できることだと思う。しかしこのように二重に制限がかかる中で、いかに想像力に自由を与えられるかが、柔軟な内界と外界との調整に役立つと思うのである。そしてそれは、青年が自己の再形成を行うのに役立つと思われる。つまり、それが内と外の間にあることで、一種の緩衝材として機能し、外から来た情報を彼らなりに吟味する場所として、想像力によって、実験的に自分を試すときに使用できる。また、他者からの反応という衝撃をやわらげ、強い衝撃を受けた場合には、一時的にその世界で休みながら、少しずつ受け入れられるように、自分なりの意味づけをしていくことができるだろう。このようにイメージ世界は、青年が、外界でかかった負荷を乗り越えることや、自分を模索することの一助となるとと思われる。

このようなイメージ世界での一時的な休息は、二人の詩人にみた孤独のように、ひとつの守られた空間であり、また、そこから戻ることは、再び他者のいる世界に生きることの開始となるのだろう。これは子どもたちが、今はまだ自分の言葉と自分の世界しかなかった頃から、集団で遊ぶ際に、みんなと言葉の調整・共有世界の調整をして、みんなのいる世界で遊び始める姿に似ているように思う。

また、イメージの共有は、J.キーツやE.J.ブロンテに見た秘密の共有のように、そこに他者との親密性や他者からの承認といった要素が関係すると考えられる。

J.キーツはW.シェイクスピアは消極的な受容によってイアーゴにもイモーゲンにもなれたのだと考えて

いた。シェイクスピアはイアーゴーでもイメージンでもないから、彼らとその状況を含めた彼らの視点がシェイクスピアの中に入ることを受容できなければ彼らの心の中は知り得ない。彼らの視点をシェイクスピアの視点にするのではなく、シェイクスピアの視点を彼らの視点にする。この点においてその受容は消極的である。

しかし、作家である彼が作中人物に取って代わられたままで生き続けることはない。シェイクスピアは自分(例えば作家)でありながら、新しい環境(作品)によって、例えばイアーゴーという自分を、例えばイメージンという自分を発揮していたということになる。この消極的受容は、自己形成における、多様な自己の試みと同じような側面を持つと思われる。イメージ世界において自由にイメージが創られることで、現実の認知や、多様な自分の表出を柔軟に行うことができるのであれば、そういった自由さは青年期の自己の再形成に役立つと考えられる。

以上のことより、自己の形成には他者との関係が伴い、青年期の自己の再形成の時には、孤独という形で他者に分かちつつも他者を求め、秘密という形で自己を守り、かつ、他者からの承認や他者との親密性を得ることが意味を持つと思われる。そして、このときに、内と外の間において、両者の調整役になるイメージ世界が柔軟であることも手助けとなるのだろう。というのも、その柔軟性をもって言語化を行っていくことは、現実の事柄に距離を置いて接し、そこにさまざまな意味を見出したりでき、また、その過程の中で、自分の一つの世界に没してしまわないように、さまざまにイメージし、その変容を受け入れたりできるようになると考えたからである。自己の形成という点で、柔軟なイメージ世界をもつことは、多様な自分を生み出すことを後押しし、そして、言語化を通しての吟味によって、様々な自己が試され、その具合が検討される機会が与えられると考えた。

この試行錯誤の流れを次のように整理してみた。まず、私たちは、イメージ世界の中で生じたイメージをもとに、新しい自分を外界に定位したとき、もしもその表現された自分に不具合を感じたならば、その違和を解消し新たなイメージをもつべく、再びイメージ世界へと旅立つ。そして新たなイメージを見つけて現実世界に戻り、また検討する。これを繰り返して、適当な自己を見出ししていくのだろう。

私たちは、適当に変容するまでの過程で得た苦しみや喜びなどの思いも言葉にして、自分の中で整理して自分の経験として、あるいは、表現することで他者と共有した経験として、自分の中に定位する。こういった作業に

よって、一つの区切りが提供され、次へと歩を進められるのだろう。

6. 今後の課題

言語化することは、その共有によって、孤独を感じる青年たちが他者と親密さを得たり、それが、自分からも現実からも距離をとって吟味することを可能にし、それによる内外両方向への調整が、自己形成に役立つだろうと考えた。しかし、他の表現方法の場合については検討しておらず、今後の課題である。また、研究対象として取り上げた2人の詩人は過去の人物であり、その心の内に関しては推測しかできないことや、文才のある人物であることによって得た考察であり、一般化することの危険もあるなど、問題点がある。また、イメージ世界との交流が常により方向に向かうとは限らず、その世界とのやり取りやその世界そのものの特徴を検討していないが、これは、本論文では、イメージ世界そのものを深く掘り下げて考察することを目的とするよりも、それを背景とした言語化がいかに作用するかには視点をおいたためである。しかし、この点も今後の課題であり、これらの問題点を含め、青年期の自己形成における内界と外界の調節だけでなく、生涯を通じて、外界との調整を繰り返しながら生きることについて考えることを通して、心理臨床場面での援助方法について何らかの示唆を得ることができるよう、検討していきたいと思う。

引用文献

- 1) V.E.フランクル(1947): 霜山徳爾訳『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』, フランクル著作集1, みすず書房(1961)
- 2) H.BUXTON FOTMAN: THE POETICAL WORKS OF JOHN KEATS, Oxford Edition, 37, 235-237(1910)
- 3) 出口保夫『キーツとその時代』上巻下巻, 中央公論社(1997)
- 4) 小川和夫『キーツのオード 鑑賞と分析』大修館書店(1980)
- 5) 中岡洋訳『エミリ・ブロンテ全詩集』国文社(1993)
- 6) 小此木啓吾『笑い・人みしり・秘密 心的現象の精神分析』創元社(1994)
- 7) 西平直喜『青年心理学』共立出版(1973)
- 8) 中島誠・岡本夏木・村井潤一『シリーズ人間の発達 7 言葉と認知の発達』東京大学出版(1999)
- 9) ミハイル・パフチン(1929): 北岡誠司訳『ミハイル・パフチン著作集4 言語と文化の記号論』新時代社(1980)

10) フランク・カーモード(1967): 岡本靖正訳『終わりの意識』国文社(1991)

参考文献

阿部知二『ブロンテ姉妹』東京研究社出版(1962)

ブライアン・ウィルクス(1974): 白井義昭訳『ブロンテ家族と作品世界』彩流社(1994)

edited from the manuscripts by C.W.HATFIELD (1941): THR COMPLETE POEMS of Emily Jane Bronte. NEW YORK, COLUMBIA UNIVERSITY PRESS

エリクソン, E.H. (1968): 岩瀬庸理訳『アイデンティティ 青年と危機』金沢文庫(1973)

学校法人神奈川大学広報委員会編『17音の青春 神奈川大学全国高校生は行く大賞2001』新潮社(2001)

浜田寿美男『意味から言葉へ 物語の生まれる前に』ミ

ネルヴァ書房(1995)

岩田潤一『認識と文化 8 わたし の世界の成り立ち』金子書房(1998)

河合隼雄『子どもの宇宙』岩波新書(1987)

松家理恵『キーツとアポローン ジョン・キーツの詩とギリシア、ローマ神話』英宝社(2000)

岡本夏木『言葉と発達』岩波書店(1965)

真田時蔵『エミリー・ブロンテ』北星堂書店(1999)

須田修『情緒がつむぐ発達』新曜社(1998)

高橋たまき『子どものふり遊びの世界 - 現実世界と想像世界の発達』ブレーン出版(1993)

田村英之介訳『詩人の手紙』富山房百科文庫5(1987)

内田伸子『ライブラリ明日に育つ子どもたち 1 想像力の発達 - 創造的想像のメカニズム』サイエンス社(1990)

青年期のイメージの言語化と自己形成

—キーツとブロンテの事例検討—

岡田 恵里, 松島 恭子

要約: 本論文では、「言葉による表現」という心的活動が青年期の心理的発達にもたらす意味を考察することを目的とした。J.キーツならびにE.J.ブロンテという二人の詩人の詩作を題材としながら、その心的特徴を分析検討した。二人は青年期に特有とされる孤独感や将来への不安を強く抱きながらも、詩作を通して心理的成長を遂げたと考えられる。彼らの生い立ちとその詩の検討を通じ、青年期におけるイメージの言語化が自己形成にもたらす作用を考察した。分析において 自己の発達、 象徴世界の獲得の流れ、 言葉の獲得過程を概観し検討した結果、言葉や自己、象徴世界に相互的な関連性のあることが明らかとなった。さらに、言葉が自己の内界の意味づけや検討する際の手助けになることが示された。

こうしたことから、青年期において、一方で孤独や秘密を大切にしながら、他方では他者との関係を模索しつつ自己を見出すという心的作業が行われ、それによって、象徴世界およびその言語化が、自分の守りや他者との親密性、自己の姿の検討に役立つことが考察された。これらの心的活動は、青年期の心理的発達の一つの特徴と考えられた。